

現代ミャンマー語における現場指示表現の主な特徴の分析

Analyzing the Main Characteristics of Deictic Expression in the Modern Myanmar Language

イン モウ テッ
YIN MOE THET

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第50号 2020年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.50 2020

現代ミャンマー語における現場指示表現の主な特徴の分析

インモウテッ *

はじめに

本稿では、ミャンマー語の現場指示用法について検討し、現代ミャンマー語の現場指示用法として4種の指示詞が使用されているという結論を導く。先行研究では、ミャンマー語の指示詞は2項対立または3項対立であると言われているが（藪（1992）、岡野（2008、2011）、大野（1983）、澤田（1999）、加藤（2015）、トゥザライン（2019））、次のようなデータでは指示詞が4種類出現しているように思われる。

- (1) a. (手に持っているボールペンを聞き手に見せながら)

「このボールペン、とても書きやすいよ」

<u>ဒီ</u>	ဘောပဲင်	အရမ်း	ရေး	လို့	ကောင်းတယ်။
<u>dī</u>	bópàn	ʔǎyáN	yé	-lô	káuntè
この	ボールペン	とても	書い	～て	良い（動詞）

- b1. (聞き手が読んでいる本を指しながら)

「その本、何？」

အဲဒီ	စာအုပ်	ဘာ(စာအုပ်)လဲ။
<u>ʔédi</u>	sàʔouʔ	bà(sàʔouʔ)lé
その	本	何（の本）？

- b2. (聞き手の後ろにある本棚の本を指しながら)

「その本、何？」

ဟို	စာအုပ်	ဘာ(စာအုပ်)လဲ။
<u>hò</u>	sàʔouʔ	bà(sàʔouʔ)lé
その	本	何（の本）？

- c. A: 「すみません、このあたりに郵便局（は）ありますか」

*岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程2年

တစ်ဆိတ်လောက် ဒီနား မှာ စာတိုက် ရှိလား။
 tāsei?lau? diná hmà sàtai? hyilá
 すみません この辺り に 郵便局 ありますか。

B : (50m ほど先の信号を指して)

「あの信号を左に曲がって 50mほど行けば
 ဟိုးက မီးဖိုခုံ ကို ဘယ်ဖက် ချိုး ပြီး မီတာ၅၀ လောက်
hókà mípwai? kò bèbe? cʰó -pí mità50 lau?
 あの 信号 を 左 曲がっ ~て 50m ほど
 သွား ရင် ဘယ်ဖက် မှာ ရှိတယ်
 ṭwá yin bèbe? hmà hyitè
 行け ば 左 に あります。

(堤 (2012 : 11) の用例をミャンマー語に翻訳した。b2 は一部改変)

ミャンマー語の指示詞の研究及び先行記述においては、近称の/di/と遠称の/hò/の2系列と考える立場(藪 (1992)、岡野 (2008、2011、トゥザライン (2019)) など)と近称の/di/、遠称の/hò/と中称の/?édi/の3系列と考える立場(大野 (1983)、澤田 (1999)、加藤 (2015)、など)に分かれており、それぞれ記述や分析を行っている。両者の共通点は、ミャンマー語の指示詞で現場指示用法として使用されている語は近称の/di/と遠称の/hò/であるということを認める点である。ミャンマー語の指示詞が2項対立だとする研究では、/di/と/hò/のみを基本形だとみなし、それに形式名詞である「物」という意味の言葉/hà/を付けて複合形にした/dihà/と/hòhà/、またそれが音声的に融合した/dà/と/hòhà/が研究対象にされている。簡単にまとめると以下表1のようになる。

表1 項対立と見なす先行研究での指示詞の対象語

	近称	遠称	対応する日本語の意味
指示詞 (基本形)	/di/	/hò/	指定指示詞 (この/あの)
基本形に形式名詞 (もの) の /hà/ を付けた複合形	/di/+hà/= /dihà/	/hò/+hà/= /hòhà/	指示代名詞 (これ/あれ)
複合形が音声的に融合した融合形	/dà/	/hòhà/	指示代名詞 (これ/あれ)

指示詞の語群の総称は、もの、方角、場所など様々あるが、ミャンマー語の指示詞の研究で主に扱われてきた対象は、指定指示詞(日本語の「こ/そ/あの」に相当)と指示代名詞(日本語の「こ/そ/あれ」に相当)であった。さらに、指示代名詞の複合形と融合形に分け、基本形と融合形が研

究対象にされている。

まず、(1)の現場指示用法を先行研究での捉え方から考えてみる。2項対立という立場の先行研究では(a)の/di/と(b2)の/hò/が対立する。つまり(a)の/di/が近称で、(b2)の/hò/が遠称を指すという考えであり(藪(1992)、岡野(2008、2011))、/?édi/は指示詞に入っていないことがわかる。

では、2項対立説に何故/?édi/が指示詞に入らないのだろうか。その理由として3つのことが考えられる。1つ目は、ミャンマーでは英語の影響が大きく、英語と対照して考えられたため、英語のような2項対立説を立てて考えたのかもしれない。もう1つは、ミャンマー語で書かれた文法辞典以外、ミャンマー語が研究対象にされ始めた時期である1960年代¹から1990年代の間の書籍は殆ど外国人の研究者によって書かれたものである。つまりネイティブスピーカーの直感ではなかったのと、ネイティブスピーカー自身の/?édi/と/hò/の使い分けが不鮮明だった可能性も考えられる。3つ目の理由として考えられるのは、言語のバリエーションである。ミャンマー語の指示詞はかつて2種のみ使用されていたのかもしれないが、現在ではそれ以上使用されている。その間の言語のバリエーションを調べる必要もあるかもしれない。

一方、ミャンマー語の指示詞を3項対立と考える立場の先行研究の指示詞の捉え方としては、話し手の近くに存在する事物は指定指示詞の/di/ (この) や指示代名詞の/dà/ (これ) で指示し、聞き手の近くに存在する事物は指定指示詞の/?édi/ (その) や指示代名詞の/?édà/ (それ) で、それ以外の領域に存在する事物は指定指示詞である場合は/hò/や指示代名詞の場合は/hòhà/で指示されるという捉え方(大野1983、加藤2015)と、(近称/遠称)の2項対立に分類し、更に/di/は近称、/hò/は遠称①、/?édi/は遠称②という捉え方をしている研究もある(トゥザライン2019)。また、3項対立ではあるが、現場指示用法として使用されるのは、近称の/di/、/dà/と、遠称の/hò/、/hòhà/のみで、/?édi/、/?édà/は現場指示としては使用されておられず、すでに文脈に現れている事柄を指す照応用法として使用されていると主張している研究もある(岡野2011)。簡単にまとめると以下の表2のようになる。

表2でわかるように、3項対立という立場の先行研究でも捉え方に差があり、特に、/?édi/の使用に関しては解明されていない。(1)の(b1)と(b2)のような場合の違いも考慮されていない。ミャンマー語の指示詞の先行研究や先行記述をまとめた限りでは、岡野(2011)とトゥザライン(2019)以外はミャンマー語の入門書やミャンマー語の全体的な文法形式の説明に記述されたものであり、記述は一部に限られている。そのため、これまでの論説を改めて検討した上で現代ミャンマー語の指示詞の体系を解明する必要があると思われる。

表2. 3項対立と見なす先行研究の捉え方

	/di/、/dà/	/hò/、/hòhà/	/?édi/、/?édà/
--	-----------	-------------	---------------

¹ 先行記述には、(Okell 1969) (Wheatley 1982) などもあったが、それについてはその都度言及することにする。

	「この」「これ」	「あの」「あれ」	「その」「それ」
大野（1983）	近称	遠称	中称
加藤（2015）	話し手の領域	それ以外の領域	聞き手の領域
トゥザライン（2019）	近称	遠称①	遠称②
岡野（2011）	近称	遠称	文脈指示的意味

また、先行研究では、/hókà/は指示詞として考慮されていなかった。その理由は、/hókà/の/hó/が遠称を表す指示詞の基本形/hò/が音声的に拡張された語であり、それに格助詞/kà/を伴って心理的な遠さを表すために/hókà/という形で指示的に使用され、真の指示詞ではないという考え方から生まれたようである。

これらの先行研究では、(1)の使用実態を十分に説明することができないと思われる。本稿ではこれら、これまで指示詞として扱われていなかったものも指示詞と積極的に認め議論を進めていく。

例(1)が現代ミャンマー語の指示詞として使用されている語だとすれば、その4つの語の特徴は何か、それぞれ使用される状況を見ることを目的にする。

以下、本論は次のように構成される。次節では、ミャンマー語の統語法と今までの指示詞の観察をまとめる。ミャンマー語の統語法を紹介した上で、ミャンマー語の特徴である文語体と口語体の差が大きいことを観察する。2節でミャンマー語の指示詞が4種類に使用されているということをサポートする調査結果をまとめ、3節で分析を行い、4節は結論である。

1. ミャンマー語の統語法と今までの指示詞の観察

本論に入る前に、ミャンマー語の統語法について概説する。

ミャンマー語の統語法は、語順と格助詞により決まる。基本語順は日本語と同じく S+O+V 型（主語+目的語+動詞）であり、動詞が後置される。文の末尾に現れる述語は動詞に限らず、名詞の場合もあり、動詞と終助詞からなる動詞述語とそれ以外からなる非動詞述語の2種類に分けられる²。形容詞に関して岡野（2007：24）は、ミャンマー語には形容詞がなく、日本語や英語の形容詞に相当する意味内容を担うのは動詞であるため、ミャンマー語では特に形容詞という範疇を設ける必要はない。名詞文も非動詞文の一種で、（裸の）名詞を述語とする文である。動詞述語が構成する文を動詞文、非動詞述語が構成する文は非動詞文になると指摘している。語順は比較的自由であり、述語が文末に現れることだけが重要視される。

² 述語が名詞になる場合は、非動詞述語文になる。

澤田 (2012: 1) では、ビルマ語³ (ミャンマー語) の特徴の一つとして、特に文法機能を担う機能語 (各種小辞⁴ や指示表現) において口語体と文語体の差異が大きく、かつ、その違いは日本語の「です、ます」調と「である」調のような終助詞の他、助詞、指示代名詞、副詞、接続詞などの品詞にもみられると指摘されている。

以下、例文を通して指示詞の口語体と文語体の違いを観察する。

(近称を表す「コ」系列の違い)

(2) a. ဤအရာ သည်စာအုပ်ဖြစ်ပါသည်။ (文語体)

ði?äyà ðì sāou? p^hyi?pàðì
これ は、 本 です。

b. ဒီဟာ(သည်)⁵ စာအုပ် (×) (口語体)

dihà (ðì) sāou? (×)
これ (は)、 本 だ。

(中称を表す「ソ」系列の違い)

(3) a1. ထိုအရာ သည်စာအုပ်ဖြစ်ပါသည်။ (文語体)

thò?äyà ðì sāou? p^hyi?pàðì
それ は、 本 です。

b1. ဟိုဟာ (သည်) စာအုပ် (×) (口語体)

hòhà (ðì) sāou? (×)
それ (は)、 本 だ。

a2. အဲဒီအရာ သည်စာအုပ်ဖြစ်ပါသည်။ (文語体)

éðì?äyà ðì sāou? p^hyi?pàðì
それ は、 本 です。

b2. အဲဒီဟာ (သည်) စာအုပ် (×) (口語体)

édihà (ðì) sāou? (×)
それ (は)、 本 だ。

³ ミャンマー語の旧名称。現在までビルマ語という呼び名をしているところもある。

⁴ 澤田 (2012) では、文の最後に続く日本語の「です・ます」のような〈丁寧〉や「である」のような語調を小辞と呼んでいる。

⁵ ()と(×)は、普通はミャンマー語の口語体に使用されていないという意味である。

(遠称を表す「ア」系列の違い)

(4) a. ဟိုးကအရာ သည် စာအုပ် ဖြစ်ပါသည်။ (文語体)

hókà?āyà ṭi sāou? p^hyi?pàṭi

あれ は、本 です。

b. ဟိုးကဟာ (သည်) စာအုပ် (×) (口語体)

hókàhà (ṭi) sāou? (×)

あれ (は)、本 だ。

上記の例文 (2)、(3)、(4) で見られる通り、ミャンマー語では口語体と文語体の間に非常に大きな乖離がある。特に、文語体は同義語が多く、指示詞を含むあらゆる品詞や文法形式でも見られる。簡単に例を出すと、(2a) の (ṭi?āyà) は日本語で (これ) という近称を表す文語体である。同じ近称を表す文語体の指示詞に (ṭi?āyà) という語もあり、両者の使用に差はない。同様の現象が (2b) にもみられ、日本語で (それ) という中称を表す語の (t^hò?āyà) の同義語に (yín) (lāgáun) などがある。先行研究や先行記述には、同義語を多く持っているミャンマー語の指示詞に属する語群を出し、例文などでまとめることが優先されたようである。そのため、文語体と口語体を、特に区別することなく論じてきたものが多く、区別した上で口語体の指示詞の特徴を詳細に扱った論考はない。

日本語の指示詞の研究史は、佐久間 (1951)、高橋 (1956) などの研究が指示詞の先駆的な研究となり、多くの研究がなされている。指示詞の代表的な用法である現場指示用法と文脈指示用法について論じたもの、談話管理理論を取り入れて論じたものや対照的観点から論じたものなどがある。

現場指示とは、話し手と聞き手が実際の現場で直接目に見えるものを指し示す際に使用する用法である。現場指示の指示詞には2つの観点があり、人称区分説と距離区分説という観点から研究するものが殆どである。

人称区分説とは、佐久間 (1951) が人称とコ・ソ・アの領域を関連させようとした説で、「コ」は話し手の領域に存在する対象を指す、「ソ」は聞き手の領域に存在する対象を指す、「ア」は話し手・聞き手どちらの領域でもない領域に存在する対象を指すと説明している。

一方、距離区分説は、「コ」は話し手の近くに存在する対象を、「ア」は話し手の遠くに存在する対象を、「ソ」はそのどちらでもない対象を指すという (阪田 1971) の捉え方である。

ミャンマー語の指示詞の研究は、研究者によって捉え方に差があるが、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の3系列と対照しながら、類似点や相違点などについての研究は行われていない。そこで、本研究では従来のミャンマー語の現場指示用法の研究で十分に論じられていなかったと思われる点を重視し、分析を行い、現場指示の特徴を明らかにする。

2. 調査結果のまとめ

2.1 調査概要

本研究では、話し手と聞き手を対立的と融合的な視点となるように位置関係を設定し、設定したそれぞれの関係を絵に描き、ミャンマー人被験者が用いる指示詞を観察する方法を採用した。以下では調査の目的と具体的な設定について論じる。

2.1.1 調査目的

現場指示用法の基本的なコンセプトである人称区分説を取り入れて図式化した対立型と距離区分説を取り入れた融合型では、1) ミャンマー語の指示詞の使用にどのような特徴が見られるか。また、日本語は基本的に話し手からの遠近によって指示詞が使い分けられ、かつ話し手からの距離に加えて、指示対象が話し手の領域にあるか聞き手の領域にあるかなども考慮して使い分けのため、2) ミャンマー語の現場指示の使用にも日本語と同じような使用が認められるか、3) その使用に類似点や相違点があるか、について明らかにすることを目的にする。

2.1.2 調査設定

口語体の現場指示の使用状況が見られるような設定をし、8枚の絵を準備した。本稿では、ミャンマー語の指示詞に4種を認め、(1)の翻訳データに基づき/di/は近称、/hò/と/?édi/は中称を指し示し、/hókà/は遠称という立場をとることにする。

場面の設定をする際、対象になる事物は近称・中称・遠称の指示詞を使用して示されるように考慮し、ミャンマー語の指示詞 (/di/、/hò/、/?édi/、/hókà/) の選択についてみることにした。

2.1.3 調査方法

本稿では、ミャンマー語母語話者の指示詞の使用状況がわかるような調査を行い、その結果を考察する。被験者は20代～50代の間のミャンマー人で、日本語と対比して考えることを避けるため日本語学習歴のない、100名に調査した。調査資料の使用語はミャンマー語であった。

調査内容は、8枚のそれぞれの絵にまず場面説明をし、登場人物が指し示している対象物にはA、Bなどが書かれており、被験者は指示対象の絵を見て、それを指し示すとき (/di/、/hò/、/?édi/、/hókà/) の中で最も適切だと思う指示詞を選択して丸をつけるように指示を出し、丸をつけてもらった。調査時間は一人約30分程度で、対面調査ができない場合はメッセージャーなどのオンラインを使用して調査した。

調査の目的は、現代ミャンマー語の現場指示用法に使用されている指示詞の種類とその使用のされ方を明らかにすることであり、結果は回答の選択率をみることにする。指示詞の選択は、その状況で最も相応しいものを一つ選択するように指示し、複数選択はさせなかった。

「(/di/、/hò/、/?édi/、/hókà/) のそれぞれの選択回答数÷被験者数×100＝選択率」とする。

2.2 調査結果

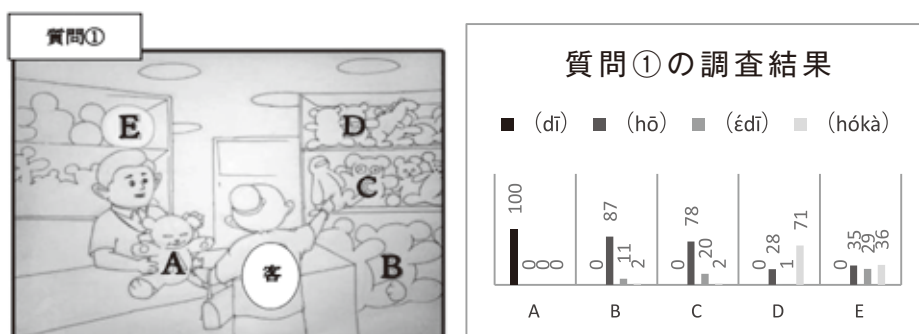
本節では、調査結果について記述する。

まず、質問①の「ぬいぐるみを買っている」場面の絵の結果を見る。

図1に見られる通り、(A) は話し手と聞き手の間にあり、かつ両者が同時に触っているため/di/の使用が100%になっている。次に、(B)と(C)であるが、両者とも/hò/が最も選択され、(D)は/hókà/を選択する者が最も多かった。(B)、(C)、(D)は話し手から同じ距離であるが、(D)のみ/hókà/が選択されていることは興味深い。

(D)は比較的高い位置に置かれており、他の対象より(D)が遠いと感じられるためであろうか。

(E)は明らかに聞き手の領域に存在している。質問①の(E)は聞き手の領域にあり、かつ聞き手の後ろにある対象では指示詞は/di/以外のものが均等に選択され(/hò/(35)、/?édi/(29)/hókà/(36))、判断が割れている。質問①の結果からわかることは、(B、C、D)のような話し手からそれほど遠くない距離、つまり中距離の場合は/hò/の許容度が高いこと、また、同じ距離ではあるが対象が比較的高い位置に存在すれば/hókà/の使用が可能になること、聞き手の領域に存在し、かつ真後ろの棚の対象を指し示すときは/?édi/の使用が見られることである。

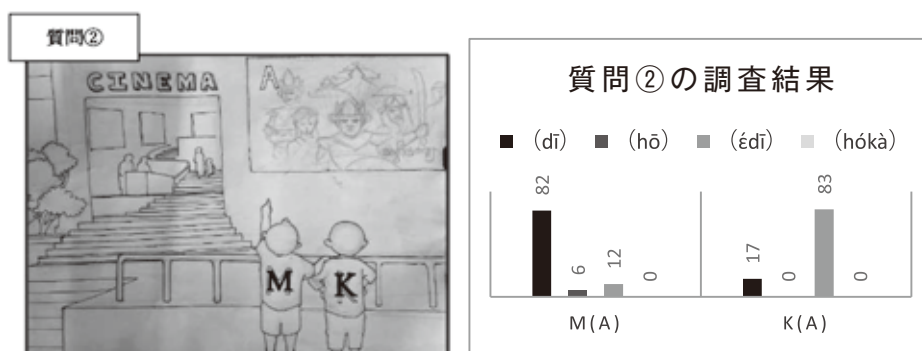


質問②は、2人の友達が映画館の前で映画を見る相談をしている場面で、(M)は(A)の映画の看板を指して、/di/ (82) /hò/ (6) /?édi/ (12) を、(K)は/?édi/ (83) を多く選択している。

/di/の使用は対象との距離と関係なく、親近感を感じたからだと思われる。/hò/は現場に存在する対象を指し示すとき遠くもなく近くもない対象を指し示すとき使用されるという理由で説明できる。/?édi/の使用に関しては、その映画に関する情報を手に持っているからか、親近感があるからかなど様々と考えられる。

(M)が最初にポスターを指し示して発言したとき、3種の指示詞が選択されたのに対し、(K)の

場合は/ʔédi/の使用に限定される。それは、(M) の質問に対し「いいよ⁶」と回答したのも原因として考慮しなければならない。(岡野 2008) では、/ʔédi/に関して/ʔédi/は話し手から遠く、聞き手に近いという回答する場合もあったが、それも詳細に調べたところ、一種の文脈指示であると考えられると指摘している。今回の (K) の場合も相手が示したものを自分が再度支持する場合であり、もつぱら/ʔédi/が用いられるだろう。もし (M) の問いに対し否定した場合を考えれば違う結果になるか再度調査する必要があると考えられる。



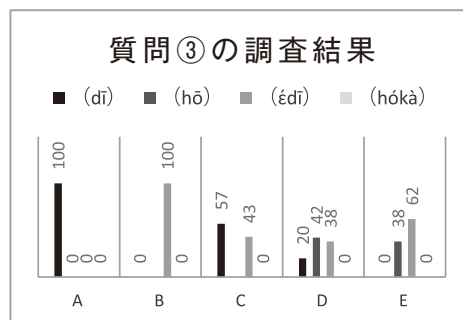
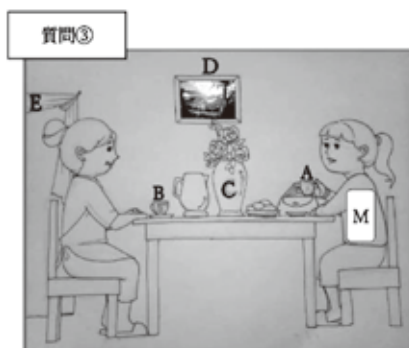
質問③では「友達の家遊びに来た」場面について見る。友達の家遊びに来ている客 (M) が発話して色々と指さしている場面で、話し手の手に持っている対象 (A) は明らかに/di/を、聞き手の手に持っている対象 (B) は/ʔédi/、話し手と聞き手の間にある対象 (C) は/di/と/ʔédi/ (57, 43)、壁にかけてある写真 (D) は/di/、/hò/、/ʔédi/ (20, 42, 38)、聞き手の後ろにあるカーテン (E) は/hò/と/ʔédi/ (38, 62) が選択されている。一つの指示詞に集中している回答より、2種類か3種類に分かれている回答の方が興味深い。原因を探ると価値があると思われる。

対象 (C) の場合は、/di/は自分の領域内、/ʔédi/は聞き手の領域内だと捉えられた可能性が考えられる。そうだとすれば、対象 (D) はどのような考え方だろう。そもそもこの絵は対立型であるが、対象 (D) に関しては融合型の観点から考えたのかもしれない。しかし、やや高い位置に存在しているのに質問①のような/hókà/で指されていない。また、対象 (E) に関しても聞き手の領域だと捉える場合は/ʔédi/が、話し手の (M) から近くもなく遠くもないと捉えられる場合は/hò/が選択されると説明できるだろう。

⁶ 調査資料は添付資料にするが、(M) と (K) の会話を以下に記す。

(M) 僕は「この・その・あの」映画が見たいんだ。君は？

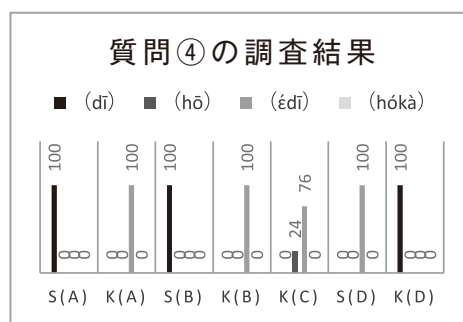
(K) いいよ。僕も「この・その・あの」映画にする。



質問④は、(S) と (K) の会話場面であり、図4で見られる通りの結果だった。まず、(S) が手元にある対象 (A) を /dī/ で指したのに対し、その対象 (A) に関して (K) の返事は /?éđi/ だった。その次の対象 (B) である時計に関する (S) の質問も同様の /dī/ であり、(K) の答えは対象 (B) を指す場合は /?éđi/ であるが、対象 (C) を同時に指して答えたときは、/hò/ と /?éđi/ (24、76) の2種に分かれている。対象 (D) に関する質問と答えのやり取りでは S (D) は /?éđi/ で、K (D) は /dī/ である。

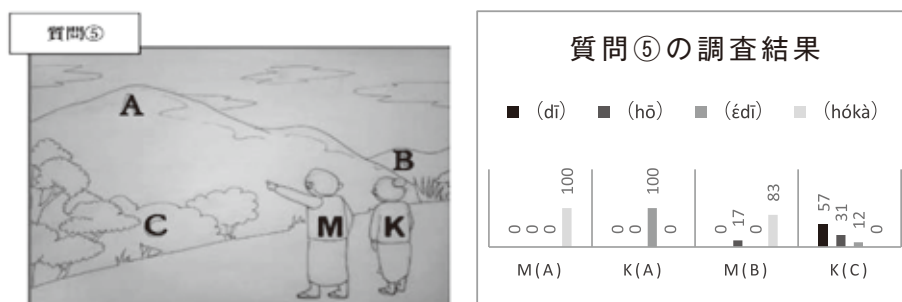
ここでは、K (A)、K (B) の /?éđi/ と S (D) が用いている /?éđi/ の違いが目立つ。なぜなら、前者の /?éđi/ は質問②で同じ距離の同じ対象を指しているが、2番目に発言する人は /?éđi/ を使用しないといけないわけであるように、今回も S (A) と S (B) の質問に対する返答であり、/éđi/ の使用に限定される。それに対し、S (D) は、聞き手の手元や領域内にある対象を /?éđi/ で指したため、/?éđi/ の使用の違いが見られる。K (A)、K (B) の /?éđi/ は先行研究で示したとおり、文脈指示用法を用い、S (D) は現場指示用法を用いると示唆される。

また、S (B) の「この時計、大きいね。見やすい。」という発言に対して K (B) 「うん、それは誕生日のプレゼントにもらったんだ。」に続き、K (C) 「その椅子と一緒に」という返事では K (C) は /hò/ (24) と /?éđi/ (76) の2種類に分かれている。原因としては、同じ指示詞の重複使用の回避かもしれないと思われる。



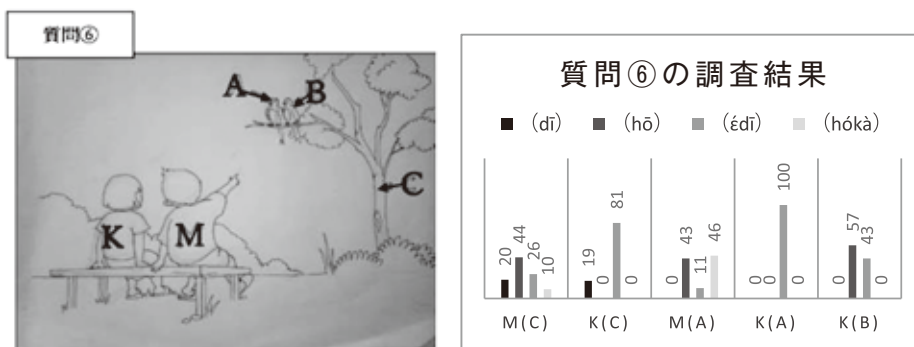
質問⑤は、(夫婦二人が景色を見ながら話している) 場面であり、男性 (M) が対象 (A) を指し示した際は /hókà/ が使用されている。それに対し、女性 K (A) の答えは /ʔédi/ で、これまでに見てきた質問②の M (A) = /di/、K (A) = /ʔédi/ と同様、M (A) = /hókà/、K (A) = /ʔédi/ の関係が取れると考えられる。

最後に使用が分かれたのは (C) を指し示した場合である。/di/ (57) と /hò/ (31) と /ʔédi/ (12) が選択されたが、対象 (C) は (A、B、C) の3カ所の中で比較的話者に近いと捉えられるため /di/ が、話し手の立場で考えると (A) ほど遠くなく、近くもないと考えられたため /hò/ と /ʔédi/ が選択されていると思われる。



質問⑥は、「兄弟が話している」場面で、M (C) では /hò/ が (44) で最も多く、次に /ʔédi/ (26)、そして /di/ (20)、/hókà/ (10) と続く。そして、それに続く K (C) では /ʔédi/ が 81 と最多、次に /di/ であり、/hò/ や /hókà/ は使用されていない。また、M (A) の質問は /hò/ と /hókà/ (43、46) に分かれているが、K (A) は /ʔédi/ のみである。K (B) も /hò/ と /ʔédi/ (57、43) に分かれている。

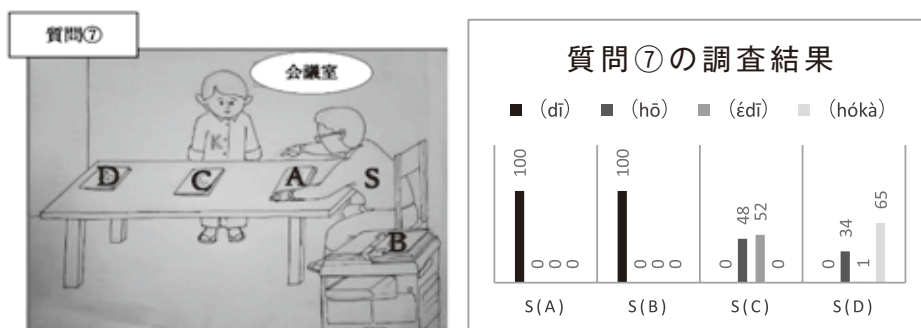
まず、M (C) が目の前の木を指して何の木か質問を発したのに対し、K (C) の返答は /ʔédi/ が最も多くなり、これまで見てきた質問②の M (A) = /di/、K (A) = /ʔédi/ と同様の傾向が見られる。M (A) と K (A) も同様、M (A) の鳥に関する話に対し、K (A) の返答は /édi/ に限定される。一つの対象に関して一種類以上の指示詞が使用可能になっている原因を探り、より明確に説明する必要があると思われる。



質問⑦と質問⑧は「会議室の中の上司が部下に指示している」場面であり、(S) は様々な対象を

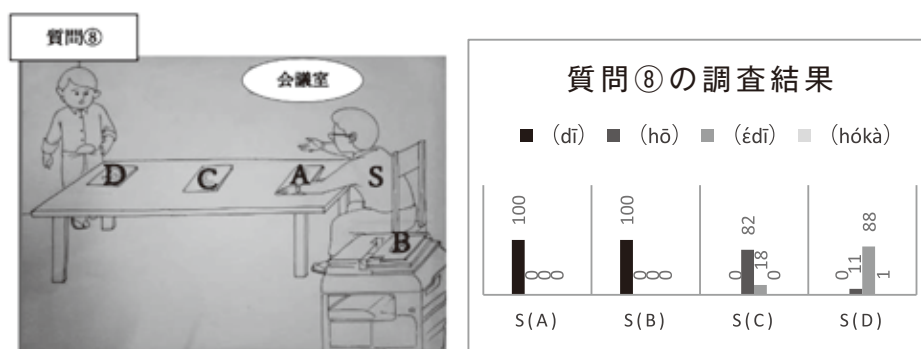
指し示している。

まず⑦の結果に見られる通り、S (A) と (B) は/di/、(C) は/?édi/と/hò/ (48、52)、(D) は/hò/と/hókà/ (34、65) に分かれている。



(A) と (B) は明らかに話し手の領域内にあり/di/のみ使用可能である。それに対し、(C) は比較的聞き手に近いまたは、聞き手の領域内に位置しているため/?édi/ (52) で指し示したが、上司の位置する場所を考慮すると/hò/の使用も拒否できない。(D) の/hókà/ (65) が選択された理由として考えられたのは、話し手の (S) から考えると対象 (C) と (D) で (D) は比較的最も離れている所に位置しているため/hókà/が選択される可能性があるように思われるが、立証する必要がある。

質問⑧の S (A) と (B) は質問⑦と同じで/di/が選択されている。対象 (C) と (D) で、(C) は/hò/ (82)、(D) は/?édi/ (88) が最も多く選択されている。(A) と (B) は話し手 S の領域に属しており、(C) は話し手から近くもなく、遠くもない位置に存在し、(D) は聞き手の近く、或いは聞き手の領域に存在する対象であるためと思われる。



3. 分析

上記観察から次のようなことが言えそうである。

3.1 対立型視点の場合

質問 (①、③、④、⑦、⑧) は対立型視点から調査したもので、結果をまとめると以下のように分析できる。

話し手の周り：質問 (①、③、④、⑦、⑧) の調査結果から、話し手が手に触れている、或いは触れられそうな対象はすべて /di/ が用いられていることがわかる。質問①では聞き手が触れていても /di/ が用いられている。

聞き手の周り：聞き手のまわりの対象を指し示す際は /hō/ 或いは /ʔédi/ が用いられる。質問③では対象 (B) が、質問④では対象 (D) が /ʔédi/ で指される。その結果から /ʔédi/ は聞き手の手元にあるか手に触れているか、或いは聞き手の周りにある対象を指し示す際に使用されると考えられる。質問③の (E) のカーテンも /ʔédi/ がやや優勢であることが見られる。対象 (E) は聞き手の周りにあるため /ʔédi/ の使用が可能になっている。質問⑦でもやや /ʔédi/ の方が多いが、/hō/ が同じくらいになっている。一方質問⑧では (D) は /ʔédi/ で指される。

話し手・聞き手以外の周り：/hókà/ は基本的話し手・聞き手以外の領域の周りに存在する指示対象を指し示すとき用いられる。質問①の対象 (D) と (E) でも /hókà/ が用いられ、物理的に上に存在するものを指しているように見える。質問⑦の対象 (D) を指し示すときでも同様の傾向が見られるが、この場合はある対象を /hō/ で指し、その次にさらに遠い場所を指す場合に /hókà/ が用いられるように思われる。同じ /hókà/ の使用は、質問⑤と⑥にも見られるが、質問⑤と⑥は空間的に遠いところを指しているのに対し、①と⑦は心理的に遠いという感情に基づいたのかもしれない。

3.2 融合型視点の場合

質問 (②、⑤、⑥) は融合型視点から調査したもので、結果をまとめると以下のように分析できる。

話し手の近くに存在する対象：/di/ は話し手の近くに存在する対象を指し示す際に用いられる指示詞である。質問 (②、⑤、⑥) では対象が離れており、/di/ の使用される対象はなかった。

話し手の遠くに存在する対象：質問⑤の対象 (A) と (B)、質問⑥の対象 (A) を指し示す際、/hókà/ が使用されている。/hókà/ は話し手の遠くに存在する対象を指し示す指示詞であるが、対象の種類などと関係があるか調査を深める必要がある。

どちらでもない対象：基本的に /hō/ と /ʔédi/ が使用されると考えられる。両者の使用は質問 (②、⑤、⑥) に見られ、同等に使用されているようである。両者の使用に差があるが、/ʔédi/ はそもそも何らかの意味で聞き手の領域に存在する対象を指すものであり、その点から見ると相手が一度指したものは全部 /ʔédi/ で指すことができるようになる「②K (A)、⑤K (A)、⑥K (C) K (A)」。

一方 /hō/ は、話し手から遠いと捉えられる対象を指すときに用いられるように見える「②M (A)、⑤M (A)」。

4. 結論

以上の考察から、ミャンマー語の指示詞には4種類が存在し、それらは次のような特徴を持つと

記述することができる。

- ① /di/ : 話し手の手元や手に触れている、話し手の領域または、話し手の近くに存在する対象を指し示す時に使用される。先行研究でも2項対立または、3項対立の立場に立っている研究者は/di/は近称を表すと主張しているため、今回は先行研究と一致した結果になる。
- ② /ʔédi/ : 聞き手の手元や手に触れるくらいの距離に存在する対象を指し示す時使用される。多くの先行研究では/ʔédi/は現場指示用法を持っていないと捉えられていたが、(加藤 2015)では、/ʔédi/は話し相手の領域内にあるものを指すとし、(トゥザライン 2019)も遠称②という呼び方をして/ʔédi/が現場指示機能を持っていることを主張した。今回の結果である質問③の(B)、質問④のS(D)で使用された/ʔédi/は現場指示用法だと思われるため、先行研究の結果と一致することになる。ただ、本研究では/ʔédi/は中称を表す指示詞であり、かつ聞き手の手元や手に触れるくらいの距離に存在する対象としたため、話し相手の領域内という捉え方をする先行研究と異なる可能性がある。/ʔédi/の位置が明確にできる調査方法を使用し、再度調査する必要があると思われる。
- ③ /hò/ : 聞き手の領域内にある事物を指し示す時使用されるが、聞き手の手元または、聞き手の手に触っている対象に関しては使用できない。先行研究では/hò/は現場指示用法を持っており、かつ遠称を表す指示対象に捉えられたが、聞き手側に関しては考慮していなかった。今回の調査で、質問⑦のS(C)(D)と⑧のS(C)は聞き手領域に位置する対象であり、/hò/の使用が許容される。質問①と③にも/hò/の使用が見られるため、/hò/は/ʔédi/と同様、中称または、聞き手の領域内に存在する指示対象を指し示すことができるという結果になったが、両者の性質を正確に整理する必要がある。
- ④ /hókà/ : 先行研究では、遠称を表す指示詞の基本形/hò/が音声的に拡張され、それに格助詞/kà/を伴って心理的な遠さを表すために/hókà/という形で指示的に使用されるようになり、真の指示詞ではないという考え方があったにも関わらず、現場指示としてよく使用されることが見られる。質問⑤のM(A)(B)と(6)のM(A)は物理的遠くに存在する指示対象を指す場合である。その結果を基に、今後は/hókà/が物理的遠さを表すために使用されるとすれば対象の種類やサイズなどに関係があるかを詳細に見る必要がある。今回の結果からは話し手・聞き手どちらでもない領域を指し示すかまたは、遠距離を指し示す時使用される指示詞として位置付けすることができるが、場合によって聞き手の領域内に属する対象を/hókà/を使用して指し示すことができた。質問①の(E)と質問⑦の(D)は聞き手

の領域内に存在する対象であるが/hókà/の使用があったため、同じ所に2つまたはそれ以上の対象を比べ分けるときに使用される可能性も考えられる。まとめると、先行研究で指摘された通り心理的な遠さを表すためのほか物理的な遠さを表す際にも使用されるが、それ以外に何か特徴があるか見る必要がある。

<参考文献>

- 大野徹 (1983) 『現代ビルマ語入門』 泰流社出版
- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』 国際語学社出版
- 岡野賢二 (2008) 「現代ビルマ語の『指示語』の体系について」、第16回チベット=ビルマ言語学研究会、神戸学園都市 UNITY (発表レジュメ)
- 岡野賢二 (2011) 「現代ビルマ語の『指示語』」、『東南アジア学』16、pp. 75-86. 東京外国語大学
- 加藤昌彦 (2015) 『ニューエクスプレスビルマ語』 白水社出版
- 阪田雪子 (1971) 「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21、pp. 125-138. 東京外国語大学
- 佐久間鼎 (1951) 「指示の場と話す語—「人代名詞」と「こそあど」—」『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』、厚生閣 [金水敏・田窪行則編 (1992) 『(日本語研究資料集) 指示詞』、pp. 32-34. ひつじ書房 所収]
- 澤田英夫 (1999) 『ビルマ語文法 (1年次)』
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram1.pdf> (2020/4/20 最終閲覧)
- 澤田英夫 (2012) 『文語ビルマ語文法』 [改訂版]、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/training/ilc/textbooks/2012burmese1.pdf> (2010/4/20 最終閲覧)
- 高橋太郎 (1956) 「「場面」と「場」」『国語国文』25(9). 京都大学文学部国語国文学研究室 [金水敏・田窪行則編 (1992) 『(日本語研究資料集) 指示詞』、pp. 38-46. ひつじ書房 所収]
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』 ココ出版
- トゥザライン (2019) 「現代ビルマ語における指示詞の研究—現場指示、文脈参照現場指示、文脈指示をめぐって—」、東京外国語大学
- 藪司郎著 (1992) 「ビルマ語」、亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典第3巻・世界言語編 (下—1)』 pp. 567-610. 三省堂
- Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese Volume 2*, Oxford University Press
- Wheatley, Julian K. (1982) *Burmese: A Grammar Sketch*, Ph.D. Dissertation, University of California